

行為と意識と空間との歴史的関係を探る

藤田盟児

奈良国立文化財研究所研究員
☆MEIJI FUJITA

空間の理解に、建築の歴史からアプローチすることは、史料に残されていないことは知り得ないという不利がある。したがって、詳細さと具体性において問題があることは否めないが、一方で、空間にかかわる現象の世代を越えた変化をたどることができ、そこから、空間の性質と建築の変化を考察する新たな視点も探ることができる。

認知心理学者の一人であるU. ナイサーは、このような歴史的分析の必要性を、つぎのように述べている。「行為もまさしく知覚と同様に体制化され、結果にしたがって、そのたびに变化する期待によって導かれるのだという考えをここで弁護したり、詳しく述べるのにふさわしい場ではない。この考えの正当性を論じるには多くの歴史を引用することから始めねばならないであろう」*1。行為の「体制化」には、たとえば生活習慣も含まれるであろう。そして、これが建築と関係することも予想できる。このような視点からの研究は端緒についたばかりであるが、以下に筆者自身の研究から、いくつかのことを紹介してみたい。

寝殿造り住宅のアプローチの変化

図1は、12世紀に描かれた『年中行事絵巻』に見える上級貴族の住宅である。絵巻物は、左の方に開きながら見てゆくので、描かれる住宅は、必ずといってよいほど右を入口にあって、左に行くに従って住宅の奥に入ってゆくように描かれる。掲載した部分は、その表門に近い部分である。表門と寝殿の中間にあって、両者を区切っている回廊状の建物が、中門廊である。中門廊の中で、ほかよりも少しだけ高く屋根を描いてある部分が、中門である。中門のすぐ上、つまり北脇に開かれた扉が描かれている。これを車寄戸といい、12世紀中ごろから中門に代わって主要な出入口となった。その前の縁は、中門廊の外側に設けられてい

るので、外縁といい、その前にある一段低くなった踏み板は、昇降するための沓脱である。ちなみに、当時の人々は、中門廊よりも外側を外方と呼び、内側を内方と呼んでいた。また、画面上方には、塀が描かれているが、その右手奥にもう一つの沓脱が見える。これは、その奥にある侍廊の専用昇降口である。

中門廊よりも右側は前庭にあたり、表門から入った人々は、ここで状況に応じたさまざまな経路を選択し、中門廊よりも内へ入ってゆく。ここに描かれている経路だけでも4種類ある。格式が上のものから順に、中門に入り内側から中門廊に上がるもの、中門に入らず沓脱から上って車寄戸から入るもの、車寄戸には入らず縁を北に行き侍廊で呼び出しを待つもの、侍廊にある沓脱から上るものである。

ところが、図2に示した14世紀初期の下級貴族の住宅になると、さらに経路が1つ増えている。中門廊の付け根に見える、唐破風付きの妻戸である。この時代になると、ここが最も主要な出入口になっており、車寄戸という名称も、この妻戸のことになる。そのほかにも、一見よく似ているようだが、子細に見ると大きく変貌している。まず、中門がなくなっている。中門がなくなったのは、中門廊によって分けられたウチとソトを中門でつなぐという、寝殿造りの基本文法の一つが崩壊したことを示す。逆に、中門廊よりも外の前庭は、以前よりも広く描かれている。この絵師の視点は、住宅の主要な場が、寝殿前の南庭からここに移ったことを示している。中門が不要になった理由も、このことに求められるだろう。また、画面の上方に見える侍廊も、平安時代よりは丁寧に描かれていて、わずかではあるが室内の様子が見える。部屋の端に沿って畳が敷かれているのが見えるだろうか。この畳の敷き方は、後述する平安時代以来の伝統である二行対座形式を守っている。



図1 平安末期の上級貴族住宅（『年中行事絵巻』巻3-11~19紙、田中家所蔵）

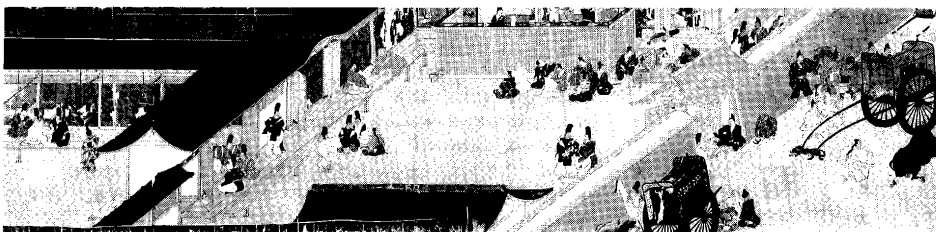


図2 鎌倉末期の下級貴族住宅（『春日権現験記絵』巻5-4紙（模本）、東京国立博物館所蔵）

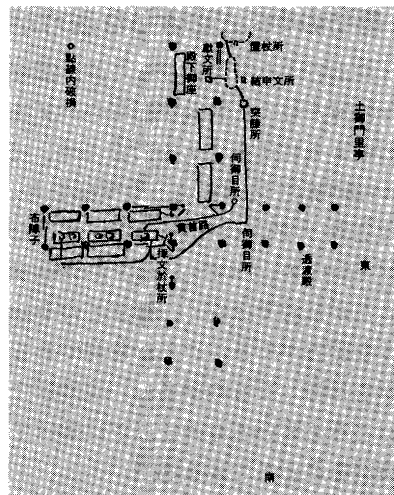


図3 鎌倉前期の関白邸指図（『民経記』安貞元年12月25日条 所収）



1960年愛媛県生まれ／東京大学卒業／同大学院修了／日本建築史／工学博士

行動形式と空間概念の変化と住宅の関係

両者の変遷をたどるために、その中間にあたる13世紀の上級貴族住宅の内部を見てみよう。図3は、関白である近衛家実の、土御門堀川邸の指図で、任官を希望する申請書を閲覧する儀式を略図によって記録したものである。土御門堀川邸は、西に正門があるので、絵巻の住宅とは左右が反対になっている。中央に南北に延びる柱列の、南半分が中門廊であり、北半分は、「殿下御座」と注記された畳を主人の座とする公卿座という部屋で、現代の応接間にあたる。一方、東西方向の柱列は、左半分が、待廊の中にある障子上という部屋で、申請書を携えて集まった蔵人らの席が、畳3枚ずつ2列に敷いてある。この畳の敷き方を「二行対座」といい、寢殿造りでの、基本的な座の構成方法である。亭主に近い方を上、表門に近い方を下とし、南側の前庭に沿った畳列を端座、北側の部屋奥にある畳列を奥座と呼ぶ。これは、ほかの部屋でも共通しており、寢殿造りの住宅室内では、カミ・シモからなる軸の両側に席が並べられ、庭側をハシ、逆をオクと呼ぶと整理できる。さらに庭や住宅の外でも、カミ・シモを設定し、その両側に人が並ぶという構成は共通しており、これが古代における基本的な空間構成方法であったといえる。

このほかにも場の構成にかかわる概念はいくつかあつて、上述のウチ・ソトや、川上貢氏が指摘したハレ・ケなどは、人や場の性質を示す一方で、住宅内の領域を大きく設定する概念でもあった。たとえば、図3において、蔵人が集まる障子上はソトにあり、関白のいる公卿座はウチにある。したがって、これを自由に行き来することは、普段の日の蔵人には許されていなかった。図中の2本の線は、「貫首」つまり蔵人頭と、末席の蔵人の、それぞれの動線を示しているが、両名ともに、関白の視界に入る公卿座の下手のところで「御目」をうかがっている。この場所より先は、主人の視野に入るので目礼しているのである。また、「突膝所」より先は、膝で歩まなければならない。これらの作法は、ソトにいるべき人間がウチに入る際に求められた身体行為であったと解される。

ところで、末席の蔵人が中門廊に入るとき、中門廊の北

端にある扉を通っている。これは腋戸と呼ばれる通用口だが、図1ではまだ存在せず、図2になると唐破風をもつ主な出入口になっている。このように、経路に変化が生じ、それが住宅の意匠を変化させたことが確認できる。また、公卿座のような接客専用の場は11世紀までなかったが、これが中門廊の内に設けられた結果、中門廊を境にした上述のようなウチ・ソトの区別は弱くなる。先述の庭の使われ方やこのことから、中門廊は玄関であることをやめ、車寄戸は中門脇から北の腋戸へと移ったと思われる。

このように、行為の変化は、空間意識の変化と関連し、それらの結果として、住宅のある部分が変化していったのであるが、この時代は、以上のような貴族住宅内部の変化とは別に、武士住宅でも、より大きな変化が起きていた。

図4は、13世紀末に描かれた有力御家人の邸宅である。やはり、図1・2と同様に、右端に表門があり、これを入ると上方に待廊が描かれ、塀を隔てて奥に公卿座と同類の部屋である出居が描かれている。ここで注目したいのは、畳の敷き方である。待廊・出居ともに、畳が部屋の周囲に口の字型に敷き回されている。これを「追い回し形式」と呼ぶが、ここに、着座形式の変化が生じていることが知られる。

武家社会では、二行対座に適したオク・ハシという空間概念が見えないが、このことが示すように、室町時代の中心的な着座型式である追い回し形式は、武家社会から普及していったのではないと思われる。このほか、中門の不在や、亭主の行動範囲の広さからうかがえる、住宅内部でのウチ・ソトの区別の弱さも、このあとの住宅の変化に大きな影響を及ぼしたようである。

以上のように、空間概念や、着座型式・経路のような日常の行為の変化は、住宅の変化と関連しており、一方でカミ・シモの空間概念や*座の生活形式は、長く継承されている。こうした各要素の関係から、変化するものと、継承されるものを明らかにしてゆきたいと思っている。

◎参考文献◎

- ★1—アルリック・ナイサー著・古崎敬・村瀬晃共訳：『認知の構図』、サイエンス社、1978年、54頁、142頁
- ★2—藤田盟児：「上代用語にみる上下の空間概念」、『建築史の脈』、中央公論美術出版、1995年、所収

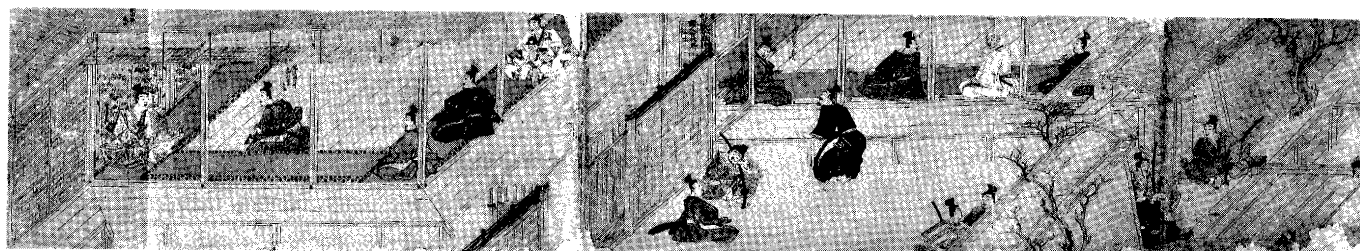


図4 鎌倉後期の武士住宅（『蒙古襲来絵詞』第35～37紙、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）